「非日常」を気軽に楽しむ

電力会社の社員寮の管理人兼まかないだった名畑さん夫妻は平成2年、当時住んでいた名古屋市から敦賀市に転勤してきた。仕事柄、長期休暇が取りにくかったことから、手軽に非日常を楽しもうと、約60㎞離れた名田庄村に古い空き家を借りた。つかの間の休日を日常から離れ、のんびり過ごすうちに「セカンドハウスを持つ楽しさ」にのめりこんでいった。定年を迎え、いったん一男さんの故郷、三重県に戻ったものの、次第に「やっぱり、田舎にセカンドハウスを持ちたい」という思いが強くなった。

そんな二人の思いと重なるように、敦賀時代の知り合いが「いい空き家がある」と紹介してくれたのが、築60年ほどの現在の住居。6LDKに大きな物置が付いた間取りを夫妻はいっぺんで気に入った。早速、建て戸を新しく入れ、囲炉裏の間を改装するなどして、自分たちの"城"を作り上げていった。

「地方では広い家を安く借りることができる。わざわざ別荘を建てなくても気軽に田舎暮らしが堪能できる」。囲炉裏に木炭をくべながら、一男さんは古民家でのスローライフの魅力を語ってくれた。

妻のくにえさんは、煮物や汁物が得意。リズミカルな包丁の音が古民家に響く

ハマグリのお吸い物。魚介類は旬のものを魚市場から仕入れている

おもてなしは露天風呂と手料理

名畑さん夫妻の朝は早い。沓見に引っ越してまもなく、敷地内の山際に作った露天風呂に毎朝夜明け前から入り、メジロやヤマガラのさえずりとともに、白み始める空の気配を体いっぱい感じている。「6、7月ごろは夜に入るのもいい」と一男さん。手でつかめるくらいの所に、蛍が光を灯すのだという。

セカンドハウスを持った目的のひとつに「田舎暮らしのすばらしさを伝えていきたい」という思いのある夫妻。2階の2間は、いつお客さんが来ても泊まれるよう用意ができており、この露天風呂を目当てに、訪れる知人も多い。

料理好きの夫妻は、おもてなしが上手。魚料理が得意な一男さんは、地元の新鮮な素材を刺し身にしたり、囲炉裏で旬の魚を炭火焼きにすることもある。くにえさんは、囲炉裏の木枠にぴったり合う大きさのご膳に、煮物や吸い物でもてなす。

「お父さんも話好きだし、誰が来たって何とはなしに何時間でも話が弾むんです」と、くにえさん。イタリアで働く一人娘、清美さんの現地イタリア語教師が、新婚旅行の際に夫と二人で訪れたことも。「あの時は身振り手振りで大変だったな」と一男さんは懐かしむ。

自慢の露天風呂の前で、友人（右）と記念撮影するくにえさん

気持ち安らぐ趣味の時間

お客さんが来ない日は、もっぱら趣味に時間を費やす名畑さん夫妻。着物好きのくにえさんは、普段から洋服よりも和服で過ごすことが多く、百枚を超す着物がたんすにぎっしり。季節や場面に合わせたコーディネートで古民家のたたずまいに趣を添える。編み物や裁縫も得意で、家の中の至る所に、手作りの小物が品よく飾られている。

骨董が趣味の一男さんは、お気に入りの蓄音機で音楽を聴いたり、壊れた三味線をリサイクルして灰皿を作ったりと楽しんでいる。愛猫シロと戯れるのも、心安らぐひと時だ。

「物価が高いし、冬は寒い。本当は、最初はどうも敦賀が好きになれなかった」と、赴任当初を振り返る一男さん。しかし、住むほどに「海も山も近く、それでいて日常生活に困るような場所でない。これほどコンパクトにまとまったいい街はない」と思うようになった。

日常から離れたゆとりある生活を求めて借りたセカンドハウス。今では三重県の実家を一男さんの妹に任せ、月に一回里帰りする程度という"逆転"の現象が起きている。「若いころはいろいろ苦労しただけに、落ち着いた今の暮らしはとても幸せ。この生活を大切にしていきたい」。くにえさんの言葉に、一男さんが小さくうなずいた。

くにえさんは、季節や場面に合わせて着物をコーディネートするのが大好き

愛猫のシロは、家族の一員

三味線をリサイクルして作った灰皿（手前）と骨董品の蓄音機（奥）